

人と出会い 本でつながる

「名こそ惜しけれ」の精神

黒沼 貞志

(SKソリューションズ代表
元日揮HLDGS勤務、山形市在住)

● ○ ● 348

取り上げる一冊は少し古いが2005年発行の「国家の品格」。著者は作家新田次郎と藤原ていの次男で数学者の藤原正彦氏。たまたま書店で「国家の品格」という書名が目に残り購入。氏の書籍との初めての出会いとなった。

私がUターンする前に30年間の企業勤務を経験しその間で海外駐在を経験しているからだろうか特にこの本の第6章『なぜ「情緒と形」が大事なのか』の中の「真の国際人には外国語は関係ない」大切なのは「国語、読書などによる総合力」と言い切る多言語に長けた著者の言葉が重く心に残っている。

この論述に反応する自分には次のような社会経験があるからだろうと思っている。一つは企業入社して間もない頃の会社の英会話教室で米国人教師に「日本の結婚式で女性が身に付ける「角隠し」と「綿帽子」の違いは？」と問われ、私を含め誰も答えることが出来なかったこと。二つ目は後

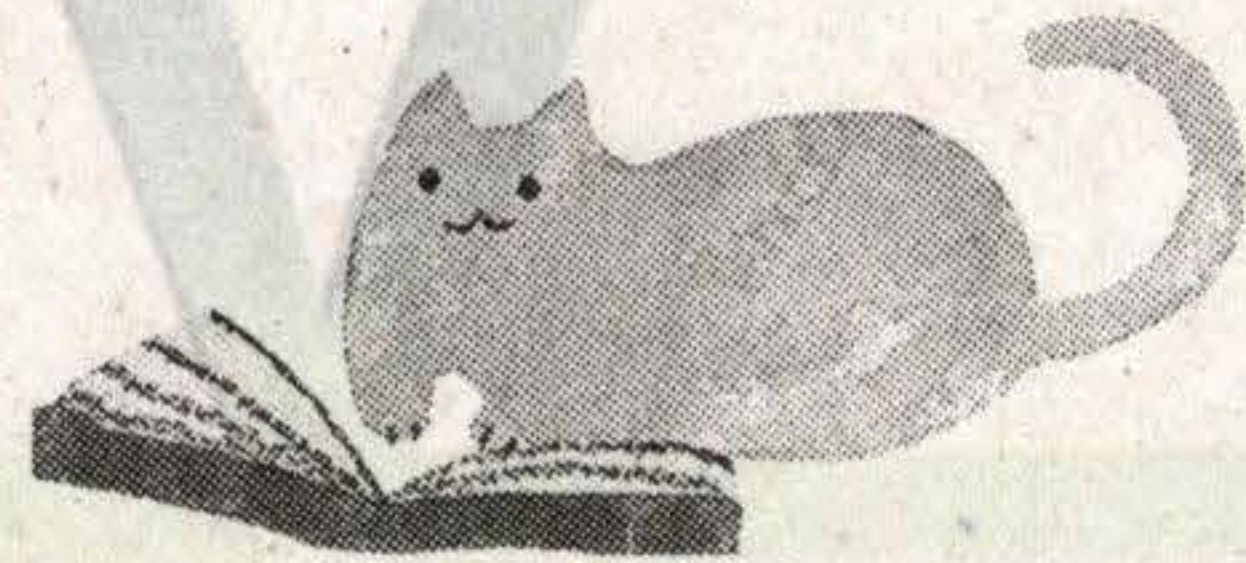
年の海外駐在現場のパーティ席上で欧米の技術者から

日本の歌舞伎や文楽、狂言などについて問われてその答えに窮したこと。日本語ですらうまく語れないことを英語で出来ないのは明らか。これらの苦い経験を記憶に留めて今の私があると思っている。Uターンして20余年、今やGoogleの無料翻訳など便利な時代となり隔世の感(過ぎたる便利に潜む不便利もあるが...)。

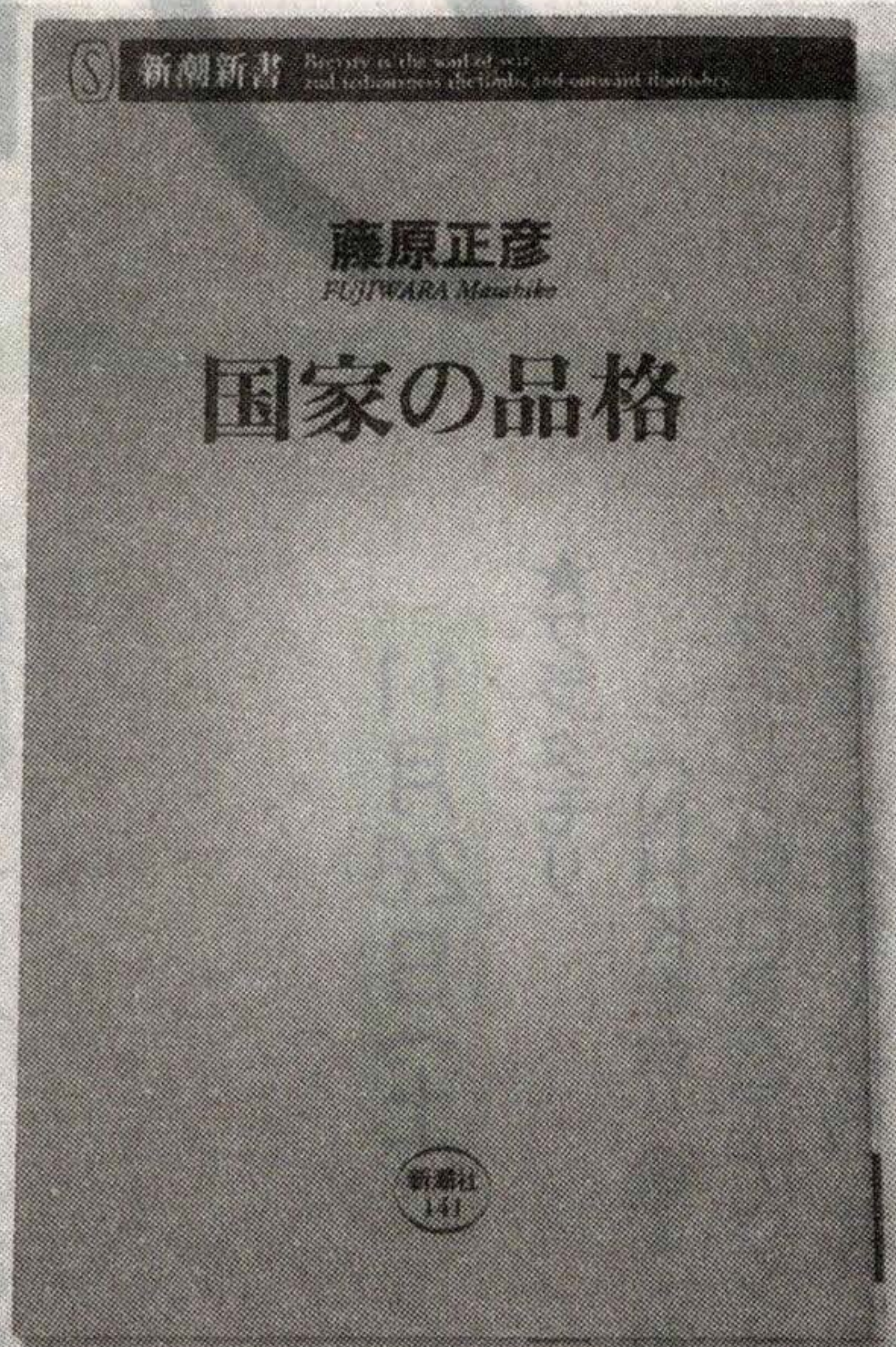
本書の最後の章「国家の品格」の最後の項「世界を救うのは日本人」に記されている次の箇所に強く共感を覚えるのでその一端を紹介したい。

「駐日フランス大使を務めた詩人のポール・クロデルは、大東亜戦争の帰趨のはっきりした昭和十八年に、パリでこう言いました。「日本は貧しい。しかし高貴だ。世界でただ一つ、どうしても生き残って欲しい民族をあげるとしたら、それは日本人だ」」

このような考えは司馬遼太郎の「名こそ惜しけれ」という精神に通底するのであると思うのは私の勝手だろうかと自問する今日この頃。



私の一冊



藤原正彦・著『国家の品格』新潮新書 2005年発行